

東区まちあるき レポート

東区 E 産探求プロジェクト事業 臨港貨物線コース を終えて / 茂野 愛香

11月23日土曜日、この頃新潟市では、紅葉が見頃になり風情あふれる景観になったと同時に、冬がすぐそこまで迫ってきているような風の冷たさと、天候の不安定さがずっと続いていました。そんな本日はあいにくの雨です。

この第2回のまちあるき「臨港貨物線コース」は100人超の申し込みがあったらしく、倍率5倍の抽選をくぐり抜けた20名の方と今回一緒に「学生記者」としてまちあるきをさせていただきました。

参加者のみなさんが到着した頃、雨は降ったり止んだりしており、風も冷たく強い中でもみなさんの表情は明るく生き生きとしているように思います。

それほど今回のまちあるきは特別、と言ってもいいような内容になっています。

ですので、抽選に漏れてしまった方々にも同じ体験を共有できるようなレポートになればいいなと思っております。

コンテナ輸送の要・焼島駅

今回のまちあるきは日本貨物鉄道株式会社 関東支社 新潟支店さまにご協力いただき、休線の駅や線路の中などを案内していただける、ということで普段は入れないような所に沢山訪問させていただきました。

焼島駅はかつて「山の下臨港鉄道」の仮信号所として大正13年に開業し、昭和62年の国鉄分割民営化によりJR貨物「焼島駅」となりました。その後、平成16年に新潟貨物ターミナル駅に管理されることになりました。そして平成20年に当時の北越製紙（現在の北越コーポレーション株

式会社)の専用線が増設され、コンテナの取り扱いを開始し、現在も運行が続いています。1日に運ばれる総量はなんと500t。コンテナの個数で換算すると105個分になります。

大正から現在まで形を変えながら人や物が流通し続けている焼島駅は、新潟の産業の発展をこれからも支えてくれる重要な拠点となる駅に違いありませんね。



ひらかれた臨港埠頭

次はバスで臨海埠頭へ。あいにくの大雨だったのでバスから下車せず説明をお聞きしました。昔は自由にここに入出入りできていたらしいのですが、今はセキュリティが厳しくなり、関係者以外誰も立ち入ることができません。これも今回が特別なまちあるきの理由の一つです。

ここは日本で唯一、市や県が管理していない「私立」の港です。敷地もとても広く従業員も多く働いています。

そこで目にしたのは中国の貿易船！普段生で見ることのできない海外の船は迫力がありました。

また、埠頭の地面には海外から運ばれてきて荷下ろしされた輸入品や、これから出荷される商品がズラーっと並べられており、物流の流れを肌で実感できました。強い雨でバスから降りられずに、近くで見られなかったのが悔しい所です…。

ここから、トイレットペーパーの原料となる紙を静岡に送り、国道 49 号や 18 号の道路上に冬に路面の凍結を防ぐために撒かれる塩などが運ばれているそうです。広い地域の安全を守る大切な品物がこんなに近くの港から全国に運ばれているのかと思うと、新潟の港の重要性が伺えます。

山の下みなとタワーの知らない役割

港のランドマークとして有名な山の下みなとタワーの地下には「新潟みなとトンネル」と呼ばれているトンネルがあり、三本ある煙突はトンネル内の空気を排出する重要な役目を持っています。

トンネル自体は全長 1,423m あり、交通渋滞の緩和や兩岸の地域の交流の橋渡しとして機能しています。

最上階の展望室では、先ほどの埠頭付近の風景など、あまり見ることはできない日本海周辺が見渡せました。また、昔実際に貨物が置かれていた場所も全体を見ることができました！



展望室には新潟港の周辺の施設や歴史を説明してくれるようなマップや写真があり、更に詳しくなることができました！



「東新潟港駅」に特別潜入

次にバスから降り、廃線沿いを歩いて東新潟港駅へ。かつて石油や新潟鐵鋼所から作られた車両が搬出されていましたが1998年の発送を最後に休止されています。

すでに線路がすぐ近くにあり、通常ではあり得ない光景にドキドキしながら進んでいきます....。

私たちの付近に、昔使われていたであろう線路レールの材料や、線路の下に並行に引かれる「枕木」と呼ばれる木々もそのまま積み上げられていました。



その後全員で線路の上を横断して向こう側の駅舎の中に行く事になり、線路を一つ一つ跨ぎながら反対側に向かいます。「線路の中」に入ることができるなんて、と感動しながら雨で滑らないように慎重に渡っていくのですが、参加者のみなさま、そして私含め線路の中から見える景色をじっくり見ようと一度は足を止めています。たくさんの専用線があった貨物駅ですから、真っ直ぐに何本も伸びているレールは誰の目にも美しく感じられます。



次に旧駅舎内へ。

中には、過去の駅長さんの名前を連ねた看板や黒電話、当時の連絡網や電話番号のリストのメモ帳など、すべてが歴史を感じる物で、自分たちがタイムスリップしたような感覚に思われます。



JR 貨物の従業員の方が、当時の貨物列車を運転していた様子や駅舎内にある装置について説明をしてくださいました。主に「信号扱い装置」と「閉そく装置」の二つの装置を使って他の駅と連携をとっていたそうです。

閉そくとは「一区間に一列車以上入れてはいけない」という決まりがあり、円形の装置を運転手が持っていて、その装置がないと発車できず、次の駅になったら次の運転手に渡す。それで初めて運行できるそうです。



昔のアナログ感の溢れる仕事の体制も、今のより人情味があるように思えます。装置を人と人の手渡しで繋いでいくなんて、とても温かい仕事風景ですね。

以上、まちあるきのレポートでした。

雨でバス移動が多く前回よりも町を歩く距離は短かった今回ですが、線路の中をみなさんと一緒に歩いている時間は何よりも貴重な歴史を感じる、特別なまちあるきになったのではないかな、と心から思います。

最後までお読みいただきありがとうございました。